

## 女真進士題名碑の拓本について

吉池孝一

### 一

拓本は、言うまでもなく、石などに刻まれた文字を紙と墨で写しとったものである。写し取られる方の石碑などは、時代の推移とともに摩滅や剥落がおこるため、精拓であるか否かということも関係はするけれど、普通には時代の古い拓本ほど情報量は多く、後代の石碑の現物よりも前代の拓本のほうが文字の研究という点では優れている場合がある。

さて、女真文字が刻された碑文の一つに女真進士題名碑がある。この碑文は日本でもよく知られており研究論文も少なくないため、拓本も相当数国内に将来されているものと想像するが、今のところ実見し得たものは僅か以下の三種にとどまる。中国にあるものはさておいて、日本にあるものについては可能な限り見比べてみたいものであるが、それは今後の課題として、まずは備忘録として三種の相違点を記すこととする。

①東洋文庫所蔵拓本。請求番号「II-16-C-1621」。裏打ちあり。

②東洋文庫所蔵拓本。請求番号「II-16-C-t-24」。裏打ちなし。<sup>1</sup>

③古代文字資料館(愛知県立大学 E511)所蔵拓本。軸装。<sup>2</sup>

①②③を見ると、ともに石碑下半分の摩滅剥落が著しい。いずれも採拓時期についての明記はない。その摩滅剥落の状態より見て、東洋文庫の①と②は同時期に採拓されたものと思われるが、②よりも①のほうがやや鮮明である。状態の良い①を裏打ちし、やや状態の劣る②をそのまま予備として収蔵したのであろう。いっぽう、③の摩滅剥落の状態は①②よりも進んでいる。これより、③は①②よりも後に採拓されたものであることがわかる。現在この原石は開封市博物館に所蔵されており現物をみることもできるのであるが、碑面の状態が③と大差ないとしたならば、現物と拓本の両者は補い合う部分があることは言うまでもないこととして、文字の研究資料としては現物よりも拓本①のほうが優れているということになる。

### 二

出版物に掲載された影印資料は大きさや鮮明度などの印刷条件が良くないかぎり文字の研究資料には適さないが、影印が拠った拓本の如何については、ある程度推察することができる。その影印であるが、普通にみることのできるものとしては次の五種があ

---

<sup>1</sup> 東洋文庫の二種は、東洋文庫 2002 の 101 頁、2296 と 2297 がそれにあたる。

<sup>2</sup> ③の写真はサイト「古代文字資料館」で見ることができる。

る。

I 金光平・金慶琮 1980 の 280 頁の直後に付された影印

II 中国民族古文字研究会 1990 の 284-285 頁の影印

III 桑原隲蔵 1909 に係わる『史学雑誌』口絵の影印<sup>3</sup>

IV 桑原隲蔵 1942 の 83 頁に付された第 170 の影印

V 北京図書館金石組編 1990 の 141 頁の影印

IV 桑原隲蔵 1942 については些か説明を要するので後で触れることとする。さて、摩滅剥落は I から V の順に進み状態は次第に悪くなる。これより、採拓の時期も、I が古く V は新しいと見て大過ないであろう。そこで先に紹介した拓本①②③との関係をみると次のようである。V は③とほぼ同様の状態であり、III は①②とほぼ同様の状態である。I と II は①②よりもはるかによい。採拓の相対的な時期は I → II → III ①② → V ③ということになろう。

### 三

このうち、桑原 1909 に掲載された III の採拓年については、桑原 1910 および桑原 1942 によって知ることができる。

桑原隲蔵は明治 40 年春から 42 年春までの二カ年に渡り清国に留学した。その間の主要な旅行記には三種あり、いずれも『史学地理』に掲載された。桑原 1910 はその内の一つで、明治 41 年（1908）に文部省に提出した報告書を転載したものであり、そこには碑石発見の経緯が記されている。明治 41 年の「五月廿二日、（金曜日）、晴、開封府滞在」の条をみると次のようである。『鴻雪因縁図記』の記述に拠り、開封の曹門外の宴臺の古跡を探したけれど見つからず、偶然に開封城内の文廟の啓聖門内の東側でこの石碑を発見したことを記し、その喜びを「年来の宿志始めて遂げ、歓喜の情言ふべからず」とする。拓本 III はこの時分に採取したものであろう。それは次に紹介する桑原 1942 によっても確認することができる。

さて、桑原 1942 は、清国留学中の幾つかの旅行記をまとめて一冊とし上梓したものである。先の『史学地理』に掲載された旅行記には写真は付されなかったが、桑原 1942 には著者及び同行者の撮影に係る写真が総計 271 枚、新たに付された。その中の「169 宴台国書碑（拓紙を貼りて）」はまことに興味深い。それは石碑の全景を撮影したものであるが、碑面には採拓用の紙が貼られ墨が載せられた状態にあり、恰も拓本を見るようである。好都合なことに、碑面の状態もある程度見てとれる。その摩滅剥落の状態はと

---

<sup>3</sup> 『史学雑誌』第 20 編第 6 号の口絵に拓本写真が掲載されており、「桑原隲蔵君所蔵」とある。その解説は「口絵解説」として 102-103 頁にある。なお、安馬彌一郎 1943 の 134 頁に「桑原博士著 宴台女真文字碑拓本及解説（史学雑誌第二十卷十一号）」とあるがそれらしきものは見あたらず、これは『史学雑誌』第 20 編第 6 号の「口絵」及び「口絵解説」の事であろう。

いうと、桑原 1909 に掲載されたⅢとほぼ同様である。したがって、両者は同一のものであるか、或いは当時複数枚採拓されたとしたならばⅢはその内の一枚ということになるだろう。これによって、拓本Ⅲは明治 41 年 5 月 22 日以降それほど時を待たない時分に採拓されたことがわかる。

ところで、桑原 1942 の写真の一部には不可解な点がある。桑原 1942 の 169 番の写真が宴台国書碑の採拓の様子を撮ったものであることについては既に述べた。次の 170 番の写真が問題となる。それは拓本であり、「宴台国書碑拓本」と題しているから、Ⅲと同一の拓本であることが期待されるけれど、どうしたことか、170 番の拓本の摩滅剥落はⅢよりも進んでいる。その状態はⅢよりも悪くⅣよりも稍良いというものである。すなわち、桑原 1942 に掲載された拓本は、「169 宴台国書碑（拓紙を貼りて）」とも桑原 1909 のⅢとも異なるのである。この事実より、桑原 1942 の出版の段階で、何らかの理由により、やや摩滅剥落の進んだ他の拓本を流用したと考えざるを得ない。このようなことについては、いずれかに於いて既に言及されているとも考えられるが、寡聞にして知らない。なお、両者異なることについて、簡便には岩波文庫本桑原 2001 の写真 169 と 170 を見比べることによって確認することができる。

#### 四

そこで、改めてⅢの採拓年と桑原 1942 のⅣを加えて採拓の時期を示すと、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ(1908年)①②→Ⅳ→Ⅴ③となる。ただし、拓本現物①②が、拓本影印ⅢⅣのいずれに近いかということについては、いまだ少し検討を要する。

以上、限られた資料の中ではあるが、文字の研究資料としては拓本影印のⅠが最良ということになるだろう。もっとも、Ⅰが拠った拓本の現物が現在どこに所蔵されているかということについては知らない。

#### <参考文献>

安馬彌一郎 1943. 『女真文金石志稿』, 京都: 碧文堂。

桑原隲蔵 1909. 「口絵解説」『史学雑誌』第 20 編第 6 号、102-103 頁及び口絵。

桑原隲蔵 1910. 「山東河南地方遊歴報告書（六）文部省交付」『史学地理』第 16 卷第 3 号、33-47 頁。

桑原隲蔵 1942. 『考史遊記』, 東京: 弘文堂書房。

桑原隲蔵 2001. 『考史遊記』, 東京: 岩波書店。

東洋文庫 2002. 『東洋文庫所蔵中国石刻拓本目録』, 東京: 財団法人東洋文庫。

北京図書館金石組編 1990. 『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本彙編 第 47 冊』, 河南省: 中州古籍出版社。

金光平・金慶孫 1980. 『女真語言文字研究』, 北京: 文物出版社。

中国民族古文字研究会 1990. 『中国民族古文字図録』, 北京: 中国社会科学出版社。